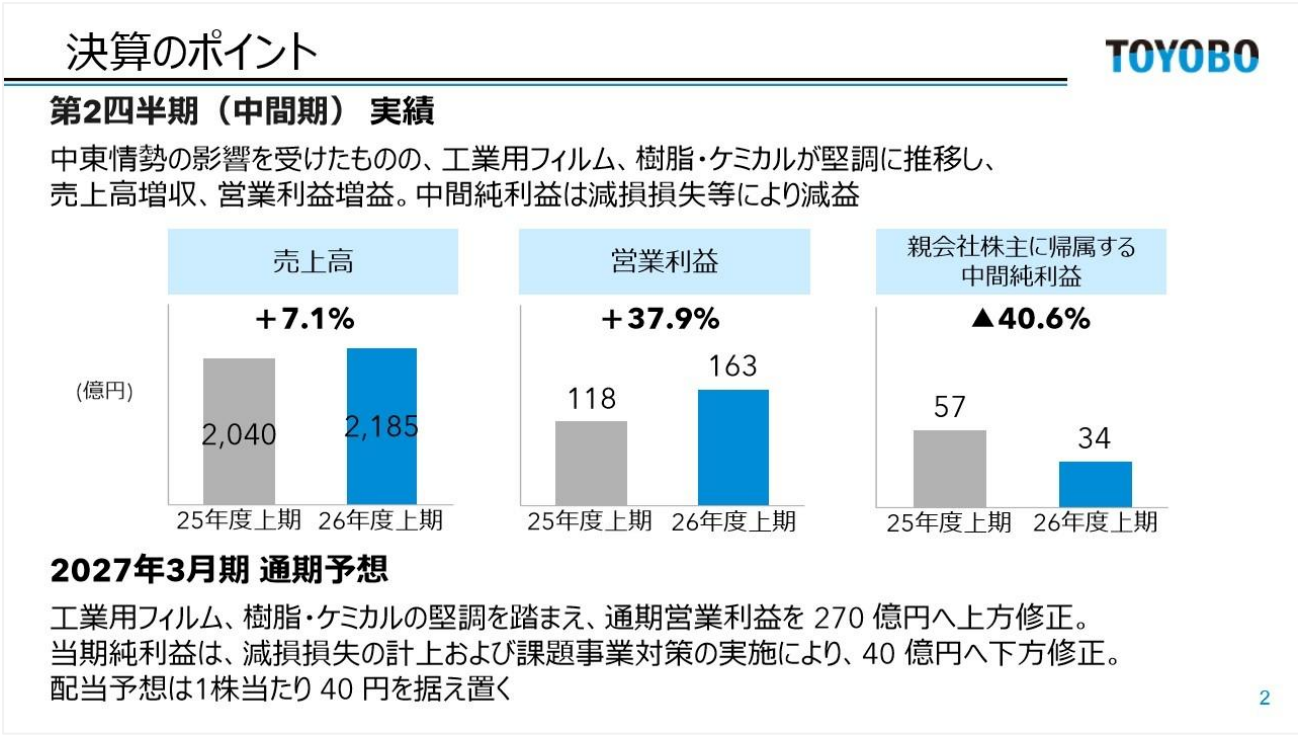
2026. 11. 10

TOYOBO
Beyond Horizons

2026年度
第2四半期 決算説明

東洋紡株式会社
代表取締役社長
竹内　郁夫

皆さんおはようございます。社長の竹内でございます。本日は当社の決算説明会にご参加いただきありがとうございます。また日頃は弊社をお引き立ていただいておりますこと、あわせて御礼申し上げます。それでは資料に従いご説明申し上げます。



今回の決算のポイントです。この中間期においては、中東情勢の影響を受けたものの、工業用フィルム、樹脂・ケミカルが堅調に推移し、また価格見直しを進めた結果、増収、営業利益増益となりました。一方、中間純利益は、医薬品製造受託事業において減損損失を計上したこと、また法人税の税負担が増えたことで減益となりました。

通期見通しは、工業用フィルム、樹脂・ケミカルについては堅調持続ということで、営業利益を当初 230 億から、270 億円へと上方修正いたします。

当期純利益は、上期に発生した減損損失に加えて、下期には、中米の繊維事業の事業休止に伴う事業構造改善費用が発生する見込みです。それを計上するということで、当初 70 億から 40 億円へ、下方修正いたします。

一旦収益が落ちるという形になりますが、来年度に向けて収益を回復するということで、配当予想は、1 株当たり 40 円を据え置きます。

決算サマリー｜PL

TOYOBO

(億円)

	25年度		26年度	上期増減	
	上期	下期	上期	金 額	率
売上高	2,040	2,175	**2,185**	+144	+7.1%
売上総利益	507	575	**558**	+51	+10.1%
（率）	24.8%	26.4%	**25.5%**	-	-
営業利益	118	161	**163**	+45	+37.9%
（率）	5.8%	7.4%	**7.4%**	-	-
営業外損益	▲ 17	▲ 33	**▲ 12**	+6	-
経常利益	101	128	**151**	+50	+50.1%
特別損益	▲ 30	▲ 5	**▲ 73**	▲ 42	-
親会社株主に帰属する中間純利益	57	54	**34**	▲ 23	▲40.6%
EBITDA *1	236	289	**305**	+68	+28.9%
EPS（円）	65.0	61.7	**38.6**	-	-
ROE *2	5.5%		**3.2%**	-	-
ROIC *3	3.8%		**4.4%**	-	-

*1 営業利益＋減価償却費（のれんを含む）
*2 26年度上期は年換算ベース。(中間純利益×2)÷期首・期末平均自己資本
*3 26年度上期は年換算ベース。(NOPAT×2) ÷(有利子負債+純資産)

3

決算のサマリー、PL です。営業利益、経常利益までは増収増益の基調です。その結果として EBITDA も着実に増益となっています。ROIC も改善しています。

しかし、特別損益が悪化したため、中間純利益は、大幅な減益となっています。結果として、ROE は低下したということです。

営業外損益・特別損益

TOYOBO

営業外損益 内訳 (億円)

	25年度上期	26年度上期	増減
受取配当金	3	**5**	+3
その他	12	**14**	+2
営業外収益 計	15	**19**	+5
支払利息	14	**16**	+2
その他	18	**15**	▲ 3
営業外費用 計	32	**31**	▲ 1
営業外損益 計	▲ 17	**▲ 12**	+6

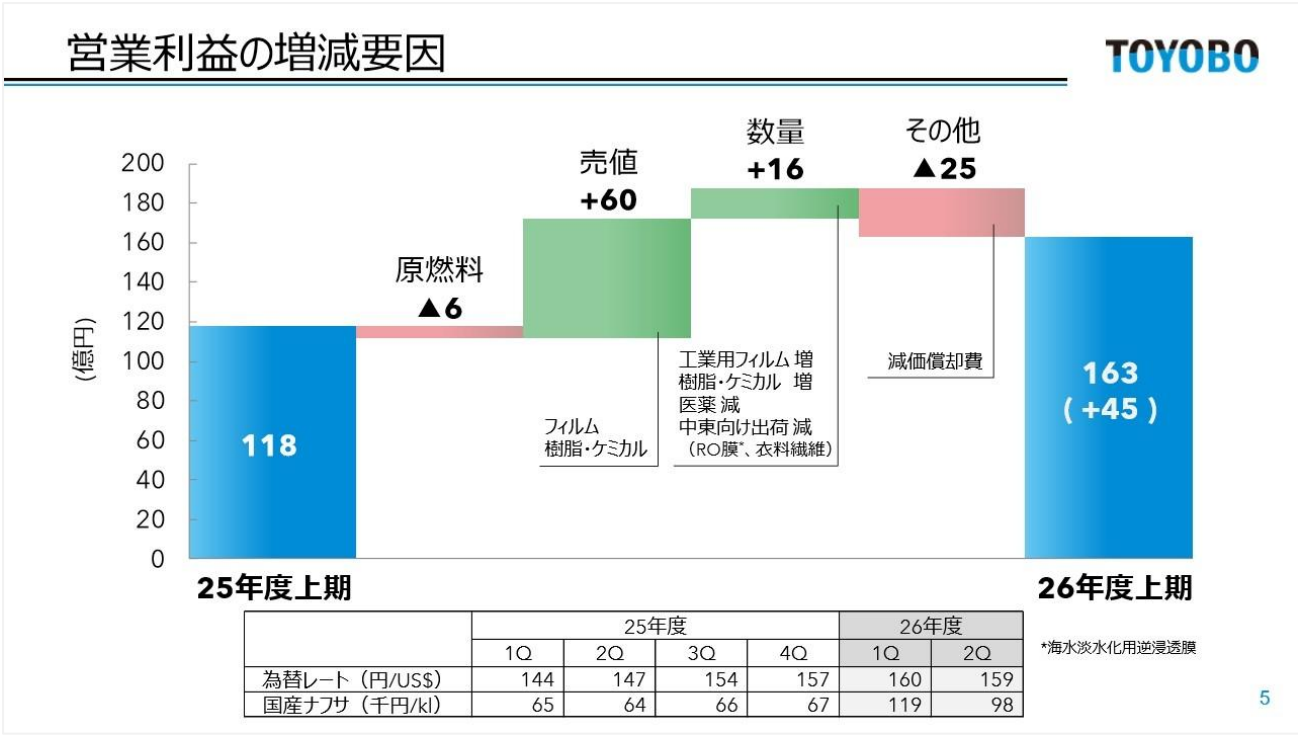
特別損益 内訳 (億円)

	25年度上期	26年度上期	増減
固定資産売却益	-	**13**	+13
特別利益 計	-	**13**	+13
減損損失	-	**68**	+68
固定資産処分損	10	**7**	▲ 3
投資有価証券評価損	-	**4**	+4
事業構造改善費用	-	**7**	+7
割増退職金	11	**-**	▲ 11
退職給付制度改定損	9	**-**	▲ 9
特別損失 計	30	**86**	+55
特別損益 計	▲ 30	**▲ 73**	▲ 42

4

特別損益の詳細です。

営業外損益は、従来と大きくは変化していません。しかし、特別損失として減損損失を計上しています。医薬は、製造を受託する事業ですが、製品の競合の台頭によって受注量が落ちたことと、先に投資した新ラインの稼働が収益に寄与するまでに時間がかかることから、減損となりました。また、事業構造改善費用としては、中米の繊維事業の事業休止に伴い、一部の費用が発生しました。



	25年度				26年度	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q
為替レート（円/US$）	144	147	154	157	160	159
国産ナフサ（千円/kl）	65	64	66	67	119	98

続きまして営業利益の増減要因分析です。

左から原燃料、売値、数量という順番に並んでいます。

原燃料については、事業収益に大きな影響があります。国産ナフサの価格が 1,000 円/kl 動くと、収益的には年間で 3 億円のコスト増減要因になります。今回 26 年度 1Q、2Q と、25 年度の同じ時期を比較すると、大きな値上がりになっています。ただし、実際の払い出しコストは加重平均されて出てくるため、コストアップの影響はこの下期に発生する見込みです。そのため、上期の原燃料は、6 億円の悪化にとどまりました。

これに対して、足元の仕入れ価格が上がったということで、お客様に説明して売値を転嫁しました。フィルム、樹脂・ケミカルを中心に値上げを実現しています。

数量については、増えたもの、減ったものが両方あります。増えたものとしては工業用フィルム、AI サーバー向けのセラコン用離型フィルムや、ディスプレイ関係のフィルムが堅調でした。樹脂・ケミカルにおいては、自動車関連、電子材料関係が堅調でした。一方、医薬については、大幅な減少となり、また、中東情勢の緊迫化に伴い海水淡水化用の膜や、中東向け特化生地であるトーブ地の出荷と商談がストップしたため、大きく減少しました。差し引きで増加となります。

その他については、これまで積極的な投資をしてきたためその減価償却費が増えました。

これらの結果、前年同期比で 45 億増の 163 億円となりました。

決算サマリー｜BS

TOYOBO

(億円)

	25/3末	(B) 26/3末	(A) 26/9末	増減 (A)-(B)
総資産	6,178	6,277	**6,094**	▲ 182
現預金	286	311	**268**	▲ 43
売上債権	1,062	1,017	**958**	▲ 59
棚卸資産	1,190	1,281	**1,309**	+29
有形固定資産	2,965	2,999	**2,880**	▲ 120
純資産	2,320	2,520	**2,500**	▲ 20
自己資本	1,953	2,133	**2,122**	▲ 11
うち利益剰余金	690	762	**761**	▲ 1
非支配株主持分	367	387	**378**	▲ 9
有利子負債	2,679	2,610	**2,479**	▲ 131
D/E レシオ	1.37	1.22	**1.17**	-
D/E レシオ（資本性調整後）*	1.15	1.03	**0.98**	-

* 劣後ローンおよび劣後債資本性調整後のD/Eレシオ

6

続きまして決算のサマリー、BS です。投資がピークアウトしてきていることと運転資金管理を徹底していることから、総資産は縮小しています。

また、フリー・キャッシュ・フローが出てきていることから、有利子負債が圧縮されています。結果、D/E レシオは 1.2 倍を下回る水準になってきています。

決算サマリー｜CFほか

TOYOBO

(億円)

	25年度		26年度	上期増減
	上期	下期	上期	
営業活動によるキャッシュ・フロー	275	175	**250**	▲ 25
投資活動によるキャッシュ・フロー	▲ 171	▲ 100	**▲ 84**	+87
フリー・キャッシュ・フロー	104	75	**166**	+62
財務活動によるキャッシュ・フロー	▲ 130	▲ 35	**▲ 206**	▲ 76
その他	6	7	**▲ 1**	▲ 6
現金及び現金同等物の増減額	▲ 20	47	**▲ 40**	▲ 21
現金及び現金同等物の期末残高	255	301	**261**	+6
減価償却費	118	128	**142**	+24
設備投資	160	131	**98**	▲ 62
研究開発費	68	73	**71**	+3

続きまして決算のサマリー、CF です。

営業活動によるキャッシュ・フローが着実に増えています。設備投資については、減価償却を下回る設備投資となっており、過去 3 年間積極的な投資を行ってきたところから、一巡してピークアウトしています。その効果が出てきているということで、フリー・キャッシュ・フローがプラスに転じました。

決算サマリー｜セグメント別

TOYOBO

(億円)

	売上高			営業利益			
	25年度		26年度	25年度		26年度	上期増減
	上期	下期*	上期	上期	下期*	上期	
フィルム	865	886	**974**	86	80	**132**	+46
ライフサイエンス	165	180	**183**	1	▲ 1	**▲ 16**	▲ 17
環境・機能材	507	594	**556**	31	66	**52**	+22
繊維	399	406	**375**	▲ 0	10	**▲ 5**	▲ 5
不動産・その他	103	110	**96**	15	21	**13**	▲ 1
消去・全社	-	-	**-**	▲ 15	▲ 15	**▲ 15**	▲ 0
合計	2,040	2,175	**2,185**	118	161	**163**	+45

*新セグメントでの25年度 下期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

8

続きましてセグメント別に説明いたします。

こちらは全体像です。今回の決算においては、明暗があったということです。

フィルム、東洋紡エムシー（株）を中心とする環境・機能材は堅調でした。一方でライフサイエンスは落ち込みました。繊維は中東の影響を受けました。

フィルム

TOYOBO

(億円)

	25年度			26年度			上期増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	446	419	865	485	489	974	+109	+12.6%
営業利益	40	46	86	52	81	132	+46	+53.2%
(率)	9.0%	11.0%	10.0%	10.7%	16.5%	13.6%	-	-
EBITDA	65	71	136	82	112	194	+57	+42.1%

包装用フィルム

■ 原燃料価格高騰の影響を受け、価格見直しを実施

工業用フィルム

■ 液晶偏光子保護フィルムは、堅調に推移

■ セラミックコンデンサ用離型フィルムは、AIサーバー向けを中心に販売が拡大

9

それではセグメント別に詳しく説明いたします。

フィルムです。前年同期比増収増益となっています。

包装用フィルムは増収でした。原燃料価格高騰の影響を受けて価格見直しを実施し、実質的には5月からでしたが、2回にわたってお客様にお願いをし、それが実現してきています。工業用フィルムも増収で、今期の業績を牽引した事業でした。液晶偏光子保護フィルムと、セラミックコンデンサ用離型フィルムが大きな柱の製品です。

液晶偏光子保護フィルムについては、売上高は2割ほど増加しました。世界のマーケットシェアが6割を超え、液晶テレビの販売台数は必ずしも増えていませんが、大画面化に伴って、出荷が増えています。セラコン用離型フィルムは、AIサーバー向けを中心に販売が拡大しました。売上高は3割ほど増加しました。数量に加え、価格も見直しを進めた結果です。いずれも引き続き需要は旺盛です。

ライフサイエンス

TOYOBO

(億円)

	25年度			26年度			上期増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	80	85	165	91	92	183	+18	+10.9%
営業利益	2	▲ 0	1	▲ 5	▲ 11	▲ 16	▲ 17	-
（率）	2.0%	-	0.9%	-	-	-	-	-
EBITDA	11	10	21	7	4	11	▲ 10	▲45.3%

バイオ

■ 診断薬用原料酵素の欧米向け販売は好調も、遺伝子検査試薬など中国市場の販売は低調に推移。海外拠点における販売も減少

メディカル

■ 人工腎臓用中空糸膜は、販売増加も、減価償却費や原燃料価格高騰の影響あり

医薬

■ 受注減少に加え、設備更新に伴う減価償却費の負担が先行し、収益性が悪化

10

続きまして、ライフサイエンスです。今回大きな落ち込みとなりました。全体としては、増収の一方で、減益となっています。

増収は、これまでの設備投資の結果、出荷が増えたということですが、減益については、医薬の落ち込みによる影響が大きかったです。

バイオでは新機台が稼働しています。健康診断に使用される診断薬用原料酵素は欧米向けを中心に好調でしたが、遺伝子検査試薬は、一時は新型コロナウイルス感染症の関係で出荷が堅調であったところから、中国との競合激化もあり落ちています。また、海外拠点における販売も中東影響で落ちています。

メディカルは増収でした。人工腎臓用中空糸膜に対する需要は引き続き旺盛で、それに応えて販売が増加しました。ただし、昨年来立ち上げています新工場の生産性にようやくめどがつきつつあるものの、減価償却費が増加し、加えてメディカル関係は価格転嫁がなかなかスムーズには進まないことから、原燃料価格高騰の影響を受けました。

医薬には先ほど申し上げましたように、大口のお客さまからの受注が落ちたことと、新ラインが稼働し減価償却費の負担が大きかったことによる影響を受けました。

環境・機能材（主に東洋紡エムシー(株)）

TOYOBO

(億円)

	25年度			26年度			上期増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	254	253	507	288	267	556	+48	+9.5%
営業利益	15	16	31	28	25	52	+22	+71.4%
（率）	5.8%	6.3%	6.0%	9.6%	9.2%	9.4%	-	-
EBITDA	26	27	53	41	38	79	+26	+49.1%

樹脂・ケミカル

■ エンジニアリングプラスチックは、自動車用途を中心に販売が増加し、収益が改善

■ 工業用接着剤"バイロン"は、海外向け電子材料用途と接着・コーティング用途の販売が好調に推移

環境・ファイバー

■ 海水淡水化用逆浸透膜（RO膜）の販売が減少
LIBS*製造工程で使用されるVOC回収装置の販売が減少

■ 不織布マテリアルは、土木・建築や自動車用途の需要堅調により収益性が改善

*リチウムイオン電池セパレータ

11

続きまして環境・機能材です。主に東洋紡エムシー（株）ということで、東洋紡（株）51%、三菱商事（株）49%のジョイントベンチャーです。増収増益となりました。樹脂・ケミカルが牽引しました。一方で環境・ファイバーは、中東情勢による影響で海水淡水化用逆浸透膜が苦戦しました。

樹脂・ケミカルでは、エンジニアリングプラスチックの自動車用の販売が堅調であったということと、最近は半導体関係でも需要があり、収益が伸びています。工業用接着剤は、海外向け電子材料用途と接着・コーティング用途のいずれも好調であり価格の見直し効果もあり、数量増・単価増となりました。

環境・ファイバーでは海水淡水化用逆浸透膜の出荷と商談が止まり、厳しい状況が続いています。VOC 回収装置は一時的に販売が落ちています。不織布マテリアルは、昨年度に国内の設備を休止し、固定費対策を打った一方で、需要が堅調であることから、収益が改善しました。

繊維

TOYOBO

(億円)

	25年度			26年度			上期増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	196	203	399	188	187	375	▲ 24	▲6.1%
営業利益	▲ 1	0	▲ 0	▲ 4	▲ 1	▲ 5	▲ 5	-
(率)	-	0.2%	-	-	-	-	-	-
EBITDA	5	7	12	3	5	8	▲ 4	▲35.6%

衣料繊維

■ 中東向け特化生地の販売減少により、収益性が低下

エアバッグ用基布

■ 海外拠点の集約を進め、生産効率が向上したことにより、収益性が改善

12

続きまして繊維です。

繊維は減収減益となりました。減収の要因は、衣料繊維で、中東向け特化生地が落ちたことと、エアバッグ用基布において、事業再編ということで海外拠点の集約をしたことです。

衣料繊維は、中東向け特化生地が比較的収益率の高い事業であることから、数量が落ちたことと工場の稼働率が落ちたことから悪化しました。

エアバッグ用基布は、拠点の集約を進めたことで、全体の生産効率が上がっています。まだまだ十分な利益は出ていませんが、収益性が改善しています。

以上がセグメント別の動きです。

2026年度の事業環境見通し

TOYOBO

セグメント	事業	見通し
フィルム	包装用	前年度並みも、後半やや減速
	工業用	液晶偏光子保護フィルムは堅調な需要が継続
		MLCCはAIサーバー関連需要を中心に拡大
ライフサイエンス	バイオ	欧米向け堅調も、中国での競争激化
	メディカル	人工腎臓用中空糸膜は国内外の需要堅調
環境・機能材	樹脂・ケミカル	自動車向けは地域差あるも需要は堅調
		電子材料向けは国内外で需要堅調
	環境・ファイバー	海水淡水化用逆浸透膜（RO膜）は中東情勢の影響あり
		不織布マテリアルは前年度並みの需要を想定
繊維	衣料繊維	中東向け特化生地は中東情勢の影響あり（出荷減少等）
	エアバッグ	自動車向けは地域差あるも需要は堅調
共通		国産ナフサ価格は高止まり　（26年8月時点から下線部を変更）

13

下期に向けての事業環境見通しです。

やや厳しめに見ているのは包装用フィルムです。世の中のインフレの中で、個人消費がやや鈍化する懸念があることから、数量的にはやや減速と見通します。バイオは、中国での競争環境は継続すると見通しています。加えて、中東関係については、当初は 4Q では正常化すると織り込んでいたのですが、影響がまだ続くと見通し、海水淡水化用逆浸透膜と衣料繊維を厳しいと見通しています。

国産ナフサ価格も、当初は 4Q にはほぼ安定すると見通していましたが、高止まりすると見直しました。下期のマイナス要因と考えています。

2026年度 業績見通し

TOYOBO

工業用フィルム、樹脂・ケミカルの堅調を踏まえ、通期営業利益を 270 億円へ上方修正。
当期純利益は、減損損失の計上および課題事業対策の実施により、40 億円へ下方修正。
配当予想は1株当たり 40 円を据え置く

(億円)

	25年度	26年度			増 減		直近予想
	実績	上期	下期	見通し	金 額	率	(26/08)
売上高	4,216	2,185	2,215	**4,400**	+184	+4.4%	4,350
営業利益	279	163	107	**270**	▲ 9	▲3.2%	230
(率)	6.6%	7.4%	4.8%	**6.1%**	-	-	5.3%
経常利益	229	151	70	**221**	▲ 8	▲3.4%	185
特別損益	▲ 35	▲ 73	▲ 38	**▲ 111**	▲ 76	-	▲ 40
親会社株主に帰属する当期純利益	112	34	6	**40**	▲72	▲64.2%	70
EBITDA	525	305	245	**550**	+25	+4.7%	515
EPS（円）	126.7	38.6	6.7	**45.3**	-	-	79.3
減価償却費	246	142	138	**280**	+34	+13.7%	285
設備投資	290	98	107	**205**	▲85	▲29.4%	225
研究開発費	141	71	79	**150**	+9	+6.3%	150

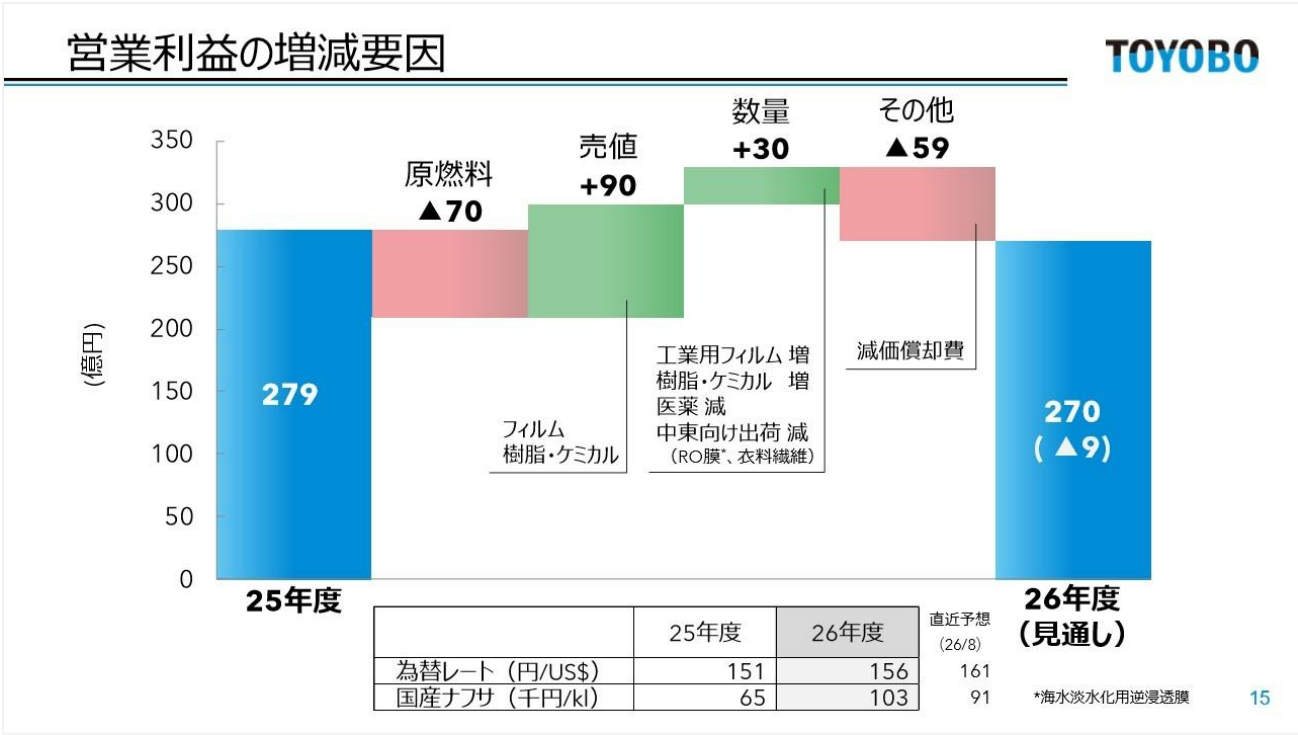
14

通期の見通しです。営業利益については、当初の見通しである 230 億円から、上方修正します。ただしそれは上期分の上振れ部分であり、下期については、おおむね当初見通しどおりとなります。

この上期は、工業用フィルムと樹脂・ケミカルが堅調であり、下期に向けてこの堅調さは続くものの、上期に実現しなかったコストアップの影響が下期には発現してきます。国産ナフサ価格は一旦下落するような動きも見せていましたが、高止まりをしています。また、中東影響についても、4Q には出荷が回復すると織り込んでいたものが、なかなか見通しが難しくなっており、下期について慎重な見方をさせていただいています。

特別損益については、課題事業対策を進め、引き続き特別損失が発生します。その結果、当期純利益は 40 億円にとどまる見通しです。

経営としては、ROE8%を目指している中で大きな落ち込みになっているわけですが、今後はアクションプランを実行し、収益の立て直しに臨みたいと考えています。設備投資はおおむねピークアウトし、過去の投資水準から比べると大きく下がっているため、キャッシュ・フローについては、引き続き安定したフリー・キャッシュ・フローが望まれると考えています。



続きまして、営業利益の増減要因分析です。中間期の分析からの大きな変化は、原燃料です。上期は 6 億円のマイナスだったところが、通期では 70 億円ということで、大きくなります。一方で売値についても、まだ上期で十分に実現できてない部分がありますので、その効果もあるということです。その他については、減価償却費が発生するということになります。

セグメント別見通し

TOYOBO

(億円)

売上高	25年度 実績			26年度 見通し			通期増減	直近予想(26/08)
	上期	下期*	通期*	上期	下期	通期		通期
フィルム	865	886	1,752	**974**	**926**	**1,900**	+148	1,850
ライフサイエンス	165	180	345	**183**	**217**	**400**	+55	390
環境・機能材	507	594	1,101	**556**	**594**	**1,150**	+49	1,150
繊維	399	406	805	**375**	**385**	**760**	▲ 45	750
不動産・その他	103	110	213	**96**	**94**	**190**	▲ 23	210
消去・全社	-	-	-	**-**	**-**	**-**	-	-
合計	2,040	2,175	4,216	**2,185**	**2,215**	**4,400**	+184	4,350

営業利益	25年度 実績			26年度 見通し			通期増減	直近予想(26/08)
	上期	下期*	通期*	上期	下期	通期		通期
フィルム	86	80	166	**132**	**50**	**182**	+16	140
ライフサイエンス	1	▲ 1	1	**▲ 16**	**1**	**▲ 15**	▲ 16	1
環境・機能材	31	66	97	**52**	**52**	**104**	+7	97
繊維	▲ 0	10	9	**▲ 5**	**8**	**3**	▲ 6	1
不動産・その他	15	21	35	**13**	**13**	**26**	▲ 9	21
消去・全社	▲ 15	▲ 15	▲ 29	**▲ 15**	**▲ 15**	**▲ 30**	▲ 1	▲ 30
合計	118	161	279	**163**	**107**	**270**	▲ 9	230

* 新セグメントでの25年度 下期および通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

16

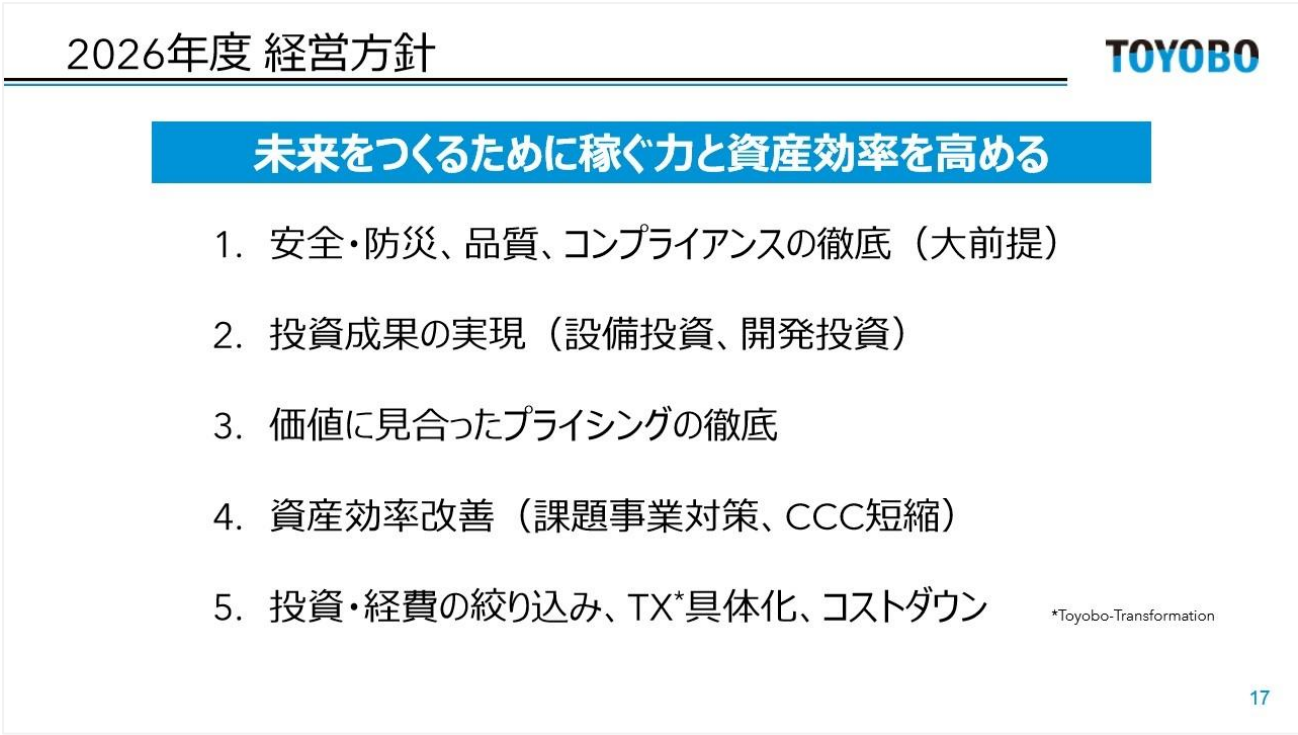
今年度の見通しのセグメント別の内訳です。営業利益の方を見ていただくと、上方修正したものがフィルム、環境・機能材、繊維で、下方修正がライフサイエンスです。

フィルムについては、下期はおおむね堅調と見通します。設備改造による能力増強の効果があらわれてくる一方で、販売試験費の発生や、包装用フィルムの数量の鈍化を織り込み、50 億円としています。

ライフサイエンスについては、上期に大きな損を出したのですが、医薬では、下期には新ラインをはじめ出荷が始まり、減損損失の効果も出てきます。また、メディカルでは、人工透析用中空糸膜の新工場の生産性がさらに上がり、単価の見直しも進み、収益の改善を目指しています。ただし、ライフサイエンスはこの収益では不十分でして、営業利益率として 2 桁以上に持っていくため、さらに 27 年度の改善を目指していきます。

環境・機能材については、下期型のセグメントですが、今期は中東情勢による影響が読み切れないことから、上期並みとしています。

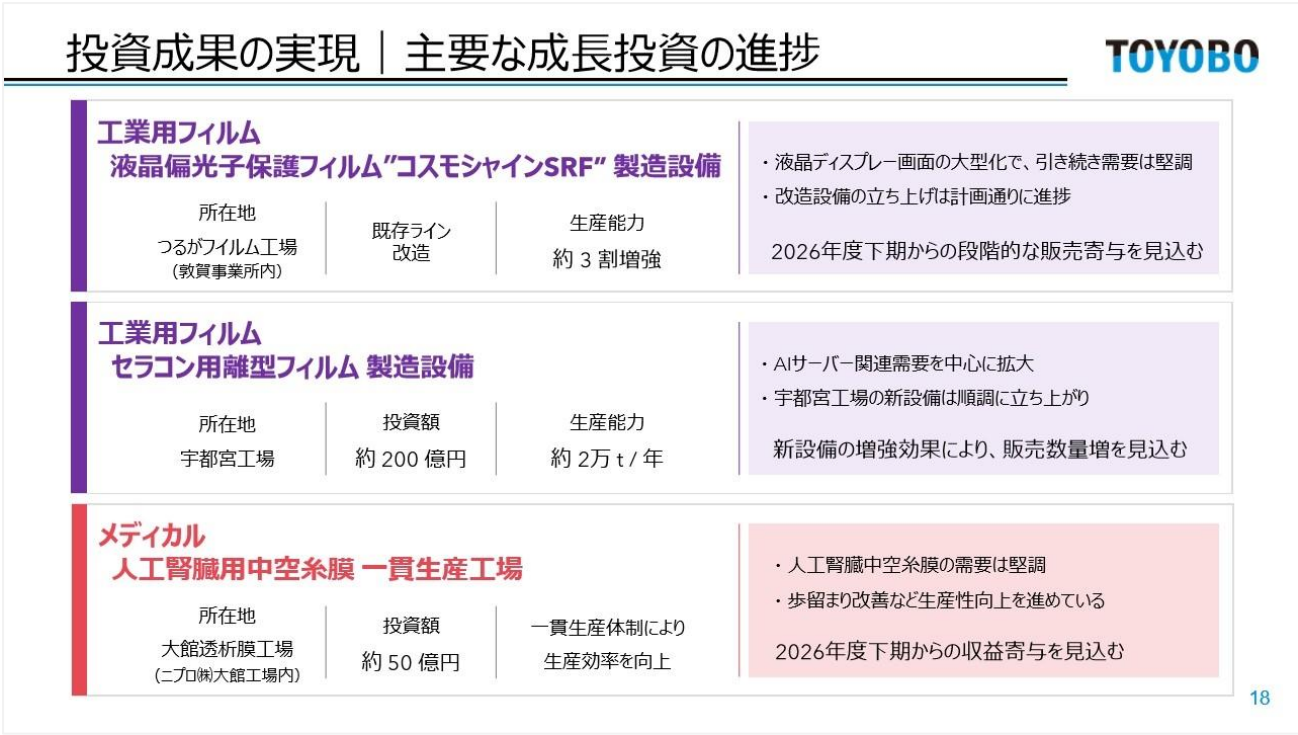
繊維についても、下期型のセグメントですが、引き続き中東情勢による影響が残ります。



最後に、2026 年度経営方針の進捗と、トピックスをご紹介します。未来をつくるために稼ぐ力と資産効率を高めるということです。

ROE を上げるということを踏まえて、稼ぐ力と資産効率を高めることをこの 1 年の経営方針に落とし込んでいます。

5 つのアクションがありますが、本日はこの中の投資成果の実現、課題事業対策についてトピックスとしてご説明します。

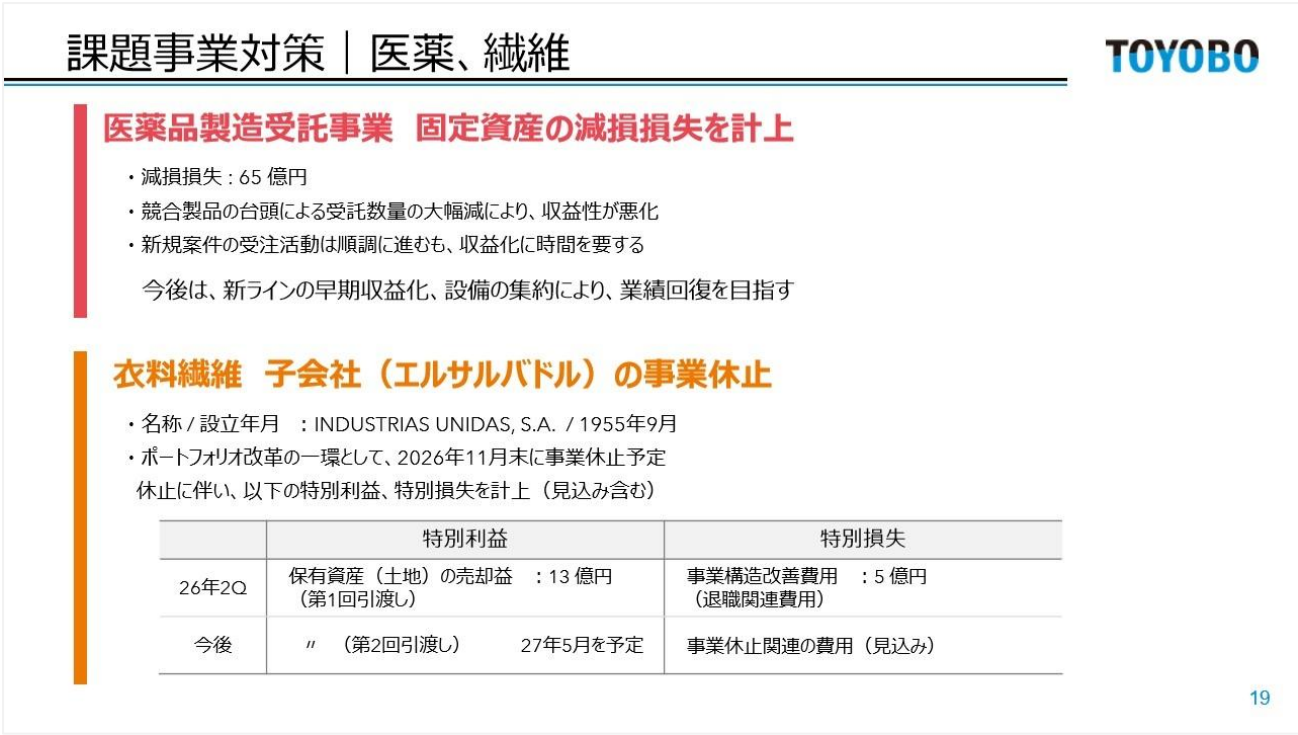


まず投資成果の実現です。これまで減価償却費を上回る投資をしてまいりました。その中の一部が今後収益に寄与してくるということです。

工業用フィルムの液晶偏光子保護フィルムですが、これは需要が引き続き旺盛です。生産能力はこの下期から増えていくということで、スペックインには時間が多少かかるため、急には 3 割まで増えませんが、増産効果が見込めます。

セラコン用離型フィルムについては、お客さまから強い引き合いがあります。これに先んじて投資を行ってきたわけですが、いよいよ本格稼働に向かっています。目算としては 26 年度に対して 28、30 年度に向けて 1.5 倍から 2 倍に生産能力が増えることになります。これをフル稼働に持っていくことが当面の課題です。

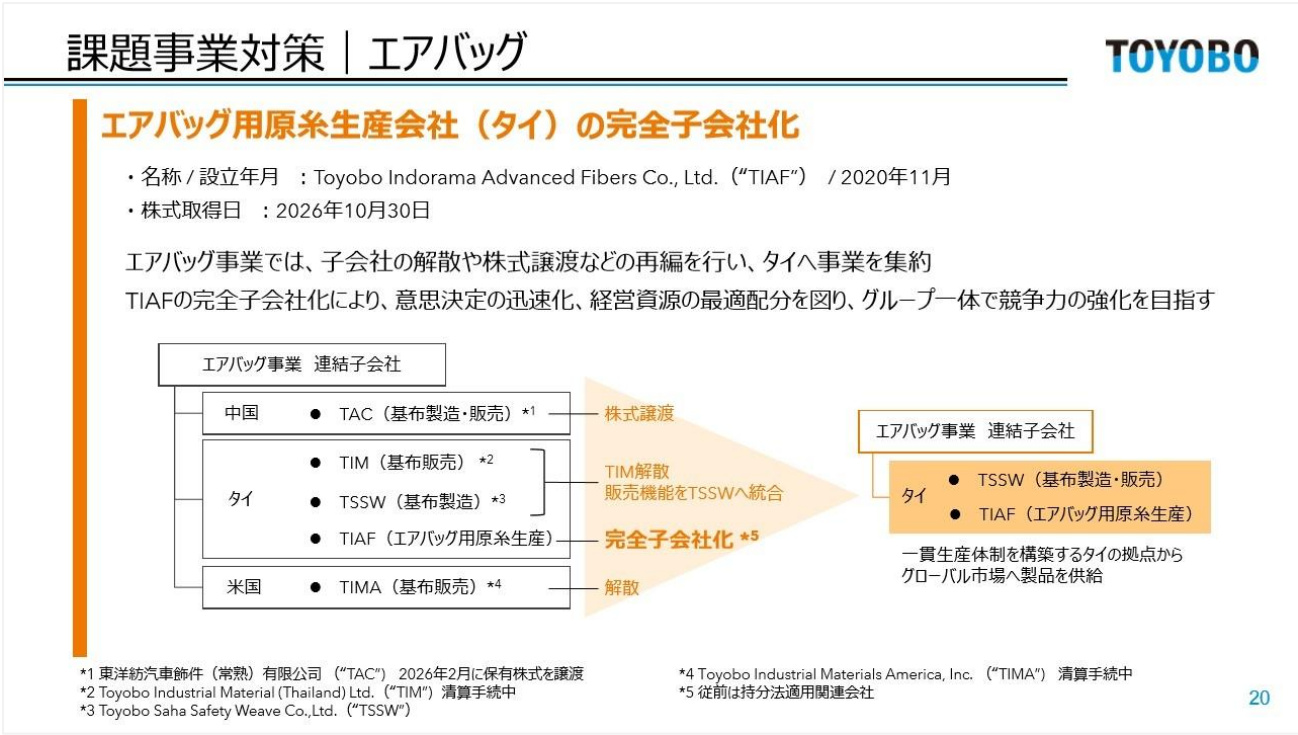
人工腎臓用中空糸膜は、生産性を上げてコストダウンを図ることにより、収益への寄与を見込んでいます。



続きまして課題事業対策です。今回特別損失を計上したものについてご説明します。

医薬品製造受託は、長年携わってきた事業であり、昨年度にようやく黒字化をしたのですが、その後、大口の受注がお客さま都合で大きく減ったため、収益性が悪化しています。一方で、注射剤等の新ラインでは、受注活動は順調です。本格的に収益に寄与するのが 28 年度、29 年度以降ですので、時間を要するということから、固定資産の価値を厳格に判断した結果、減損損失ということになりました。

エルサルバドルの事業を休止します。1955 年に戦後の日本企業として初めての海外進出の事案であり、75 年以上続けてきた事業ですが、2026 年 11 月でもって事業休止予定です。この 2Q までは、土地の売却益、事業構造改善費用を計上しているのですが、今後も、完全に事業を休止するということで費用が発生する見込みです。まだ残っている土地の売却も、来年度に予定していますので、その土地の売却益については、今年度は含めていません。



続きましてエアバッグ用基布です。この 10 月末に、インドラマグループと 50%ずつの持分であったジョイントベンチャーについて、同社の 50%分を譲り受けました。事業全体としては、これまでは日本を中心に中国、タイ、アメリカへ展開していました。日本拠点で火災事故があって以降、拠点を海外に移してきましたが、この 2 年で中国、米国の拠点で休止や事業譲渡を進め、タイへの一極集中をする方針です。

今回の完全子会社化によって、原糸での 50%分の利益を取り込めるということと、もう一つ、織物までの一貫生産を手がけることによる生産性や効率の改善が進むということから、火災事故以降、長く赤字に苦しんでいたところから、黒字化だけではなく、資本コストを賄う収益性のある事業へと、めどが立つということです。

以上、経営方針についてご説明しました。26 年度については、特別損失を計上したということで一時的に当期純利益が落ち込みますが、27 年度以降の利益回復へ向けて、先ほど掲げました 5 つのアクションプランを着実に実行していきます。2030 中期経営計画、その中間点としての 2028 年度の目標達成のめどを、この下期から来年度 1 年をかけて、作っていきたいと考えています。

私からの説明は以上です。ご清聴ありがとうございました。

TOYOBO

補足

セグメント別情報

TOYOBO

(億円)

売上高	25年度					26年度	
	1Q	2Q	3Q*	4Q*	通期*	1Q	2Q
フィルム	446	419	435	451	1,752	485	489
ライフサイエンス	80	85	83	97	345	91	92
環境・機能材	254	253	272	322	1,101	288	267
繊維	196	203	197	209	805	188	187
不動産・その他	53	50	49	61	213	51	45
消去・全社	-	-	-	-	-	-	-
合計	1,029	1,011	1,035	1,140	4,216	1,104	1,081

営業利益	25年度					26年度	
	1Q	2Q	3Q*	4Q*	通期*	1Q	2Q
フィルム	40	46	42	38	166	52	81
ライフサイエンス	2	▲ 0	▲ 4	3	1	▲ 5	▲ 11
環境・機能材	15	16	23	44	97	28	25
繊維	▲ 1	0	4	6	9	▲ 4	▲ 1
不動産・その他	7	7	8	13	35	6	7
消去・全社	▲ 7	▲ 8	▲ 8	▲ 7	▲ 29	▲ 6	▲ 8
合計	56	62	65	96	279	71	91

＊新セグメントでの25年度 3Q~4Qおよび通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

トピックス｜統合報告書

TOYOBO

東洋紡グループ統合報告書「TOYOBO REPORT 2026」を公開

2026年版のポイント

- 「2030中期経営計画」で掲げる、「事業ポートフォリオ改革」「未来への布石」「基盤づくり・強化」の3つの施策について詳しく解説
- 「企業価値＝経済的価値×社会的価値」の考え方のもと、当社の“めざす姿”と価値創造の道筋を提示
- 「ワンチーム経営」を掲げ、継続的な企業価値向上とROE8%超の達成に向けた姿勢や決意などを紹介

ダウンロードURL

日本語版：https://ir.toyobo.co.jp/ja/ir/library/integrated.html

英語版：https://ir.toyobo.co.jp/en/ir/library/integrated.html



トピックス｜ESG

TOYOBO

■ EcoVadis社 サステナビリティ評価で「シルバー」獲得

・EcoVadis社：サステナビリティ関連の取り組みの国際的な評価機関
「環境」「労働と人権」「倫理」「持続可能な資材調達」の
4分野における企業の取り組みを評価

・2019年度より8年連続でメダルを獲得

・2026年6月に対象企業の上位15%に与えられる「シルバー」評価を獲得

サプライチェーン全体でのサステナビリティ向上につながる継続的な取り組みにより、過去最高の総合スコアを更新



EcoVadis 表彰ページはこちら https://recognition.ecovadis.com/craxEaNOSkeaELiTP56cdg

■ GPIF が採用するESG投資指数*のうち5つの構成銘柄に継続選定

*国内株式を対象

- FTSE JPX Blossom Japan Index
- FTSE JPX Blossom Japan Sector Relative Index
- MSCI 日本株 ESG セレクト・リーダーズ指数
- MSCI 日本株女性活躍指数（WIN）
- S&P/JPX カーボン・エフィシェント指数

ご注意

本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved

TOYOBO
Beyond Horizons

© TOYOBO CO., LTD. All rights reserved.